

小さな子供の頃から、僕は体が弱かった。

今思えば、特に消化器系が弱かったのだろう。

お腹を壊して下痢をしたり、逆に便秘になって何日もウンチが出ないで苦しむことも多かった。

ママはそんな僕を優しく看病してくれて、お腹が壊れた時には、おかゆを作って食べさせてくれたり、便秘の時には浣腸してくれたりした。

それはまた、幼稚園の頃、いや記憶に無いだけで、もつと前からだっただろうから、そうやってママにウンチの様子を知られたり、浣腸されたりするのは、我が家では、当たり前のことだったんだ。

我が家は母子家庭、今で言うシングルザーつていうやつで、ママが僕を産んだのは二十才ちよつとの頃だった。物心ついてから、よその家庭と比べられるようになって、どうしてウチには、パパが居ないの、つて、訊いたことがあった。

その時は、ちよつと困つたような表情で、「パパはね、お星様になつちやつたの。」つて言われたから、素直にその言葉を受け止めた。

ママが悲しそうな顔をしたから、この話題は触れちゃいけないんだと、子供心に思つて、それ以降は、パパの話はしないようにした。

もうちよつと大きくなると、家には位牌も遺影も無かつたのだから、死別じゃなくて何かの理由で離婚したのだろつと、なんとなく察していた。

ただ、それをはつきりとママに問いただすことはしなかつたんだ。

幼い頃から、そうやってママに浣腸なんかをされてたから、小学生になつても、その習慣は続いた。

年に数回だつたり、ほぼ毎月だつたりしたけど、我が家では、便秘でお腹が痛くなると、「ウンチが出てなくてお腹が痛い。」つて、ママに言うのは普通の事で、「そう、じゃあ浣腸してスッキリさせようか。」つて、ママが言うのもいつもの事だつた。

子供の頃からの僕が浣腸される手順はいつも一緒だ。

小学生の僕は、ズボンとパンツを脱がされ、お布団の上に横向きに寝かされ、浣腸の準備が整えられる。箱に入ったイチジク浣腸を一つ取り出し、ワセリンとトイレットペーパーを揃え、ママが僕に浣腸の宣言をする。「祐くん、これから浣腸するからね。お薬入れてウンチがしなくなっても、ギリギリまで我慢するのよ。お薬がしつかりお腹に染み込むまで我慢しないと、ウンチが全部出なくて、すつきりしないからね。頑張るんだよ。」そして、ママは僕のお尻の穴に、指でワセリンを塗ってくれて、イチジク浣腸を挿しこみ、中のお薬をお腹に流し込むのだ。

入れ終わったら、お尻の穴をトイレットペーパーで押さえてくれる。

だんだんウンチがしなくなつて、ムズムズしてくるんだけど、ママはその様子を見て、時計を眺めながら、「祐くん、まだ2分しか経つてないから、もうちょっと頑張ろうね。」なんて、励ましてくれる。

そして、「ママ、もう無理、漏れちゃうよ。」つて言うと、「じゃあ、トイレに行こうか。」とお尻の穴を押さえたまま、で、トイレまでついてきてくれる。

便器にしゃがみ込むと、ドアを閉める隙もなく、お尻から浣腸のお薬とウンチが噴き出してくる。

もちろんママが見ている前だ。

幼稚園の頃には、その後ママがお尻を拭いてくれたけど、小学生になってからは、ママはドアを閉めて先に出て行って、僕は自分でお尻を拭いてから、部屋に戻るんだ。

もちろん、学校の友達にも誰にも、このことを話したことはない。

やっぱり、ウンチの話とかママに浣腸されたとか、恥ずかしい気はしたんだ。

それに、いつの頃からか気づいていたんだけど、ママに浣腸されると、ちよつと恥ずかしくて怖いような気持ちになるけど、なんだかワクワクするような気分にもなってしまうこと。

そして、おちんちんが硬くなってしまうことに。

そんな話は、もつと誰にも言えない事は解っていた。

ママの手が、お尻の穴にワセリンを塗ってくれる時には、くすぐつたいような感じで、これから起こる事が、怖いけどちよつとワクワクするし、お尻の穴に浣腸の先っぽを入れられる時は、ムズムズした感じだし、ママが、丸いこ

ろを押しつつぶして、お薬がお腹の中にちよろちよろと流れ込んでくるのは、ちよつとひんやりして、ゾクゾクした感じになってしまった。

そして、お腹の中でちよろちよろとお薬が流れ込むのを感じると、おちんちんが硬くなっちゃうんだ。ママにお尻の穴を押さえてもらって、我慢している時は、だんだんウンチしたくなって苦しいんだけど、いっぱい我慢すれば、いっぱいウンチが出て、スッキリするし、ママも「沢山出たわね。頑張ったのね。」って褒めてくれる。そうやって褒められると、恥ずかしいよりも誇らしいような気分にもなるんだ。

小学5年になった頃にも、そんな習慣が続いていたんだけど、ある時、ママは「もうこんなに大きくなったんだから、今までみたいに子供用じゃなくて大人用でもいいわよね。」といっつて、今までよりもちよつと大きなイチジク浣腸を使ってくれた。

いつものように浣腸されてトイレから戻って、パンツとズボンを履こうとした時に、ママがクスツと笑った。

「あら、おちんちんが大きくなってるのね。」

その言葉に、どんな意味が含まれているのかはつきりとは理解出来なかつたけど、性的な部分をママに言い当てられて、とつても恥ずかしく感じたんだ。

中学に入った頃も、そんなふうにママからの浣腸は続いていた。

そして、僕が恥ずかしいと思えば思うほど、おちんちんは大きく硬くなって、トイレでウンチして部屋に戻る時には、なるべく前を隠して、ママには見られないようにしていた。

でも、ママはそんな僕の様子はすっかりお見通しだったようだ。

ある時、部屋で、パンツを履こうとする僕を、ママが制止した。

「ねえ、祐くん。パンツ履く前に、いいことしてあげようか。」

僕は、ギクツとした。

パンツを履く前ってことは、おちんちんを出したままって事だ。

何をされるんだろう。期待やら不安やら、複雑な心境のまま、ママの言葉にうなずいていた。

ママは、僕をお布団に仰向けに寝かせると、僕のおちんちんに手を伸ばした。

自分で自分のおちんちんに触って、気持ち良いのは気づいていたが、ママに触れるのは、また別の感覚だった。

ママは、優しく僕のおちんちんを握ると、緩やかにそれを上下に動かし、僕に快感を与えてくれた。

片手でおちんちんを刺激しながら、もう一方の手でその下の袋を撫でるようにするのも、体がよじれるくらいに気持ち良く、僕はすぐに、おちんちんの先から白い液を噴き出して、快感でぐったりしてしまった。

「浣腸でウンチしたいのを、ギリギリまで頑張った御褒美よ。もう中学生になったんだから、すぐにこういう事も覚えるでしょう。だから、ママが祐くんに教えてあげたかったの。」

そして、にっこり笑って言った。

「今度だけよ。中学進学祝いの御褒美は。解ってるでしょうけど、こんなこと、ママにやつてもらったなんて、誰にも行っちゃダメよ。」

これから先、誰か女の子とそういう関係になって、こういう気持ち良い行為もすることになるんだろうってことは、ぼんやりと考えていたんだけどね。

でも、ママの手でやつてもらったことは、想像以上に気持ち良くて、僕は、また同じようにやつて欲しくなったんだ。

もちろん、すぐに自分の手でおちんちんを弄るオナニーも覚えた。

でも、自分で弄ってピョッて出すのも気持ち良いけど、ママの手でやつてもらったほどじゃなかった。

あれは、特別な快感だったんだ。

だから、次に浣腸してもらった時にも、ママに甘えておねだりしたんだ。

ママは、ちよつと悲しそうな顔をして「困った子ね、こんなこと母子でやることじゃないのよ。」と言ってけど、やっぱり同じように、ぼくのおちんちんを握って気持ち良くしてくれた。

そして、それが二度三度と続くと、浣腸の後の御褒美は当たり前前のことになって、僕は逆に、便秘になることを心待ちにするようになっていった。

便秘になれば浣腸してもらえる、浣腸で我慢すれば御褒美が貰える、そうは思うけど、日々のウンチは我慢しようと思ってもしたくなくなってしまうし、お腹を壊して一日に何度もトイレに通う日もある。

なかなか、思うようには行かないから、余計にそれが待ち遠しくて、特別な御褒美だった。

そんなある時、僕はふと疑問を持ち、ママに向かって、それを言ってみた。

「ねえ、ママ。いつも使ってくれるイチジク浣腸って二個入りだよ。でも、僕にしてくれる時は、いつも新しい箱を開けて、一個出してしてくれるよね。残ったもう一個はどうしてるの。」

ママは、ちよつと頬を赤らめ、こんなふうに答えたんだ。

「馬鹿ねえ。祐くんだけが便秘になるんじゃないのよ。親子で体質だつて似るんだから。」

「えっ、それつて。ママも便秘になつて、浣腸をしてるの。」

母はうつむいて返事はしなかつたけど、わずかに頭を縦に振つた。

ママも浣腸してるんだ、という事実を知つて、僕は思わず、そのシーンを想像してしまつた。

「じゃあ、ママが僕にしてくれるみたいに、今度浣腸する時は、僕がやつてあげるよ。」

僕がそう言つと、ママはためらいながらも、

「そうね、ママが祐くんに浣腸してあげるんだから、祐くんがママにしてくれたつて、おかしくないわよね。今度便秘になつて浣腸使うことになつたら、お願いしようかな。」

その時には、そんな話だけだつたけど、その機会は、案外早くやつてきた。

僕が便秘になつて、浣腸から御褒美までの一連の儀式を済ませた後だつた。

「ねえ、ママも便秘してるのよ。この前言ったよね。祐くんがしてくれるつて。お願いしてもいいかな。」

ママの口から、その言葉が出て、僕は心臓が倍くらいの速さでドキドキし始めたしような気分になつた。

「うん、いいよ。やつてあげる。」

僕がそう言つと、ママはさつきまで僕が横になつていたお布団に横になつた。

スカートのお尻の部分を捲り上げ、パンティーを太腿まで下げる。

「お願いします。」

まるで医者さん言うように、僕に向かってそう言つた。

何度も自分がされているから、手順は解つている。

でも、こんな形でママのお尻を見るのは初めてだ。

手が震えそうになるのを押さえ、箱から残りの一個のイチジク浣腸を取り出し、袋から出す。

ワセリンの容器の蓋を開け、指にワセリンを取る。

ママのお尻に手を伸ばし、上側のお尻の肉を持ち上げるようにして、お尻の穴が見えるようにする。

ママは、僕に背を向けて横向きに寝て、くの字型に体を曲げているから、お尻の穴より前の部分も見えてしま

う。

周囲に毛が生えた襷のようなものが見える。

僕はなるべくそちらを見ないようにしながら、ママのお尻の穴にワセリンを塗る。

そして、イチジク浣腸のキャップを取り、ゆつくりとその先端をお尻の穴に挿し込む。

細い部分が全部入って、丸い部分だけがお尻から出ているようになって、僕はその丸い部分をゆつくりと押しつぶした。

ママは僕に背を向けているから、その表情は見えないが、どんな気分で、浣腸されているんだろうと、そんなことを思ってしまう。

僕みたいに怖くてワクワクする気分なんだろうか。

お腹の中にお薬が流れ込むのを感じてるのかな。

僕の場合、おちんちんが硬くなっちゃうけど、ママはおちんちんは無いし、硬くなるような処は無いのかな。

それでも、僕みたいにちよつと気持ち良く感じてるのかな。

浣腸の中のお薬をママに入れながら、あれこれと考えてしまった。

丸い部分を押しつぶし、さらに二つ折りにして残った液も入れてしまうと、僕は浣腸を引き抜き、折りたたんだトイレットペーパーをお尻の穴に当て押さえてあげる。

ママは、浣腸された姿勢のまま横になっている。

僕の方からは顔が見えないから、苦しそうな顔をしているのかどうか判らないけど、体は動く様子はない。

僕は部屋の時計の秒針だけをじつと見ていた。

5分程すると、ママのお尻がもぞもぞと動きを見せるようになった。

「ママ、大丈夫。」

「うん、大丈夫よ。まだ我慢出来るわ。」

そう言ってさらに数分後

「もう限界みたい。トイレまで連れて行って。」

ママがそう言うので、僕はママを起き上がらせて、お尻に当てたトイレットペーパーを押さえたままで、ママをトイレまで行かせてあげた。

パンティーがちよつと下がっているから、普通に歩くには邪魔だったかもしれないけど、どっちにしてもウンチを我慢してモジモジと歩くのだから、そんなに変わりはないみたいだ。

トイレに入つて、便座に座るまでお尻の穴を押さえていてあげたけど、ママは僕より我慢強いみたいで、僕ならその場で出しちゃうのに、座つてからも我慢を続けていた。

「ありがとう、祐くん。もういいから、ドアを閉めて出て行つてね。」

そう言われて、僕はトイレから出されてしまった。

僕は、部屋に戻り、使い終わったイチジク浣腸をゴミ箱に捨て、ワセリンを薬箱に戻し、ペーパーもトイレの前の棚に戻してと、後片づけをした。ママのお尻に入った浣腸と、僕に入ったものが、ゴミ箱の中に並んでいるのは、なんだか不思議で、ちよつとエッチな気分だった。

もちろん、僕のおちんちんから出た白い液を拭いたペーパーも、一緒に入っていたんだけど。

ママは、僕みたいに部屋にパンツを履きに戻ってくるわけじゃないから、そのままトイレから出て、何事も無かったかのように、夕飯の支度を始めた。

僕も机に向かつて宿題を済ませ、さつきの事など何も無かったように、二人で夕食になった。

でも、その晩、僕はママのお尻を思い出しておちんちんが大きくなって、オナニーをしてしまった。

その後、何度か同じような事が、繰り返された。

僕の浣腸だけだった頃からすれば、僕の浣腸、御褒美、ママの浣腸という一連の流れが、出来上がってきていた。

不思議だったのは、僕が便秘をするタイミングで、ママも必ず便秘になって、浣腸して欲しいと言つてことなんだけど、それは、あまり追及しないことにしていた。

だって、浣腸も御褒美も気持ち良いし、ママのお尻を見てそこに浣腸を入れるのもとてもワクワクするような気分だったのだから、追及して、それが無くなったら残念だって、そんなふうに思ったんだ。

もう中学二年生になったある日、いつものようにママから浣腸してもらつて、御褒美もしてもらつて、ママに浣腸する時に、ふざけてママに言ったんだ。

「僕が毎回、ママに御褒美貰つてるみたいに、今度はママにも御褒美してあげようか。」

ママは、「何言ってるのよ。」と言って、相手にもしてくれなかったけど、トイレから出た後で、部屋に来て、片づけをしてる僕に、こんなふうに言った。

「まだ、女の子のあそこも見たこと無いんでしょう。ママを気持ち良くさせる御褒美なんて出来るの。」  
そう言われると、僕は言葉に詰まった。

「ママに御褒美、じゃなくて、そういう口実で女のあそこを見ただけじゃないの。」

それは凶星だった、もちろんママを気持ち良くさせてあげたいのは嘘じゃないけど、まだ未経験で女の子のあそここの構造も知らないのに、どうやれば気持ち良くなるのかなんて、判るはずもない。

「仕方ないわね。おちんちん弄って射精させてあげるなんて、それだけでも異常な親子関係なんだから、この際、性教育もやつてあげる。」

でも、一つだけ守つてね。親子なんだから、おまんこにおちんちんを突っ込むのはダメよ。子供が出来るような事は絶対に禁止。それ以外なら、見るのも触るのも許してあげる。」

そう言つて、僕の布団の上でパンティーを脱ぐと、大きく脚を開いて膝を抱えるように座った。

当然、僕の目の前には、ママの大事な部分が丸見えになる。

さらにママは、自分の手で自分のおまんこの襷を開いて、中の部分が良く見えるようにしてくれた。

そして、自分で一つ一つの部分を指さして解説を始めた。

「さあ、良く見るのよ。ここがクリトリスつて男の子で言えばおちんちんね。一番感じる部分だし、感じてくるとおちんちんみたいに大きく硬くなるの。まあ、おちんちんほど、膨張はしないけどね。」

その下には、おしっこが出る穴があるの。あんまり良く判らないだろうけどね。そして、その下の穴が、男が一番好きな部分ね。おまんこの穴、膣つていつの。この奥に子宮つていう子供を育てる処があるの。」

ここにおちんちんを突っ込んで、精液をピュつて出すと、それが中に入つて行つて、女の体の中にある卵子とくっついて、子宮の中で大きくなるの。あなただつてママのここで十月月かけて大きくなつたんだからね。」

「気持ち良くなるのは、膣に入れられた時と、クリトリスを刺激された時で、どっちが良いかはその人によるけど、今は、あなたに膣に入れてもらうわけにはいかないから、クリトリスを弄つてね。」

そう言われて、僕はママのクリトリスに、そつと指を伸ばした。

最初に触れた感じは、皮膚の皺が寄っている部分のようだったけど、優しく指で撫でていると、次第に大きくなつ

てくるのが判った。

「もつと、強く弄ってもいいのよ。」

ママがそう言うので、もつと強くグリグリと押ししたり、二本の指でつまんで引つ張ったりもしてみた。

ママはちよつと目が潤んで、声も上ずつた感じになって「祐くん、初めてにしては上手ね。」つて、褒めてくれた。

「沢山経験すると、女の喜ばせ方も上手になるんだけどね。舌でクリを舐めたり、あそこに指を入れながら、もう片方でクリを弄つたり、おっぱいを吸つたり、乳首を噛んだり、色々と感じるようになるわね。」

女の人も人それぞれだから、痛いくらい噛まれて気持ち良くなる人もいれば、あちこち弄らずに、おまんこにおちんちんを挿入して、出し入れだけをしてもらった方が気持ち良いつても人も居るのよ。」

そんないろんな事で、気持ち良くなるんだと驚いて、ママに「僕もそんなこと、やってみてもいい。」つて聞いたんだけど、「祐くんはまだダメ。」つて言われてしまった。

「最初からいろんな事をしようなんて思つちやダメよ。基礎練習をしてから応用編ね。それに、ママを相手にそんなことあれこれするなんて、いけない事なんだからね。」

そう言いながらも、クスツと笑つて、「まあ、ここまでやつてる基礎編だつて、親子ですることじゃないんだけどね。」と言う。

確かに、ママにおちんちんを弄つてもらつて、気持ち良くなつてしまうなんて、誰にも言えないイケナイ事なんだし、ママのアソコを弄るなんて、それが基礎練習だとしても、もつとイケナイことだろう。

でも、その場では、ママを気持ち良くさせてあげたくて、僕は一生懸命に、ママのクリトリスを弄つた。

ママは、次第に息遣いが荒くなり、声を漏らすようになって、最後は、身体全体に力が入つて、全身を硬くしたかと思つたら、その後でぐつたりとしてみました。

「祐くんにされて、逝つちやつた。」

「気持ち良くなつたの。」

「うん、祐くんからの御褒美ね。とつても上手だつたわよ。」

「じゃあ、これからも御褒美してあげるよ。」

「素敵だけど、病みつきになりそうで怖いかな。親子でこんなことやるなんて、いけない事なんだからね。」

それからしばらくは、僕が便秘になることもなく、浣腸の登場の機会も無かつた。

もしかしたら、ママは便秘になって、自分で浣腸していたのかもしれないけど、それは僕には判らないことだった。

ママが僕に浣腸して欲しいって言うのは、僕に浣腸した時だけだったけど、便秘になって浣腸を使うのは、僕が小さい頃からだったのだから、自分でするのは当たり前で、僕がしてあげる方が不自然な事なんだ。

そう考えると、僕にお尻を見せて、浣腸をさせてくれるのも、ある意味で僕に対する御褒美のようなものなのかもしれない。

この前の、ママへの御褒美だって、本当は弄られて気持ち良くされるママよりも、僕の方が嬉しかったのだと思っ

た。そしてまた、僕が便秘になると、ママから浣腸され、僕が御褒美をおねだりし、おちんちんを気持ち良くさせてくれた後で、今度はママが僕から浣腸されて、トイレの後は、ママの御褒美っていう理由付けで、ママのアソコを僕が弄って、気持ち良くさせてあげる、っていう一連の流れが出来た。

でも、ママはその時の気分で「今日は、ママに御褒美は要らないわ。」って言うって、浣腸だけの時もあつたんだ。

ママが御褒美までする時は、浣腸する時から、パンティーを脱いでしまっ。

御褒美が要らない時は、最初の時と同じように、太腿くらいまで下げるだけだ。

その違いがはつきりしてくると、僕は当然、今日はパンティーを脱ぐかどうか、気になってしまった。

でも、ママも御褒美プレイは気に入っていた様子で、4回のうち6回くらいは、パンティーを脱いで浣腸させてくれた。

僕の後の浣腸は、毎回必ずだったから、それは本当に便秘だったのか、僕に浣腸させてくれる口実だったのか、それともママは浣腸されるのが好きだったのか、その辺りははつきりとは解らなかつた。

それに、小さい頃からの習慣とは言え、もうママの身長と同じくらいに大きくなった僕に、嫌な顔もせず、どちらかと言えば嬉しそうに、浣腸してくれるのは、浣腸するのも好きなんだろう。

そんな危ない母と子の関係は、中学卒業の頃まで、ずっと続いた。

僕のママへの御褒美も次第に上手になり、エスカレーターもしていった。

片方の手でクリトリスを摘まんで弄りながら、もう片方の指は、おまんこの穴に入れて中をかき回すように刺

激するなんて事も、すんなりと出来るようになった。

ママは「そんなことまでされて、恥ずかしい。」って言うけど、どうも感じていたみたいで、いつもより大きな声を上げて、絶頂に達していた。

考えてみれば、その頃のママは三十歳代前半。

学校でも、若くて美人のママって言われていて、ちょっと自慢だったし、他の子の母親なんて、どのおばあちゃんって言いそうなくらいだった。

恋人が居て、そういう事をしていても当たり前前年頃だ。

僕といつこぶつきだったし、再婚するでもなく、恋人が出来る様子もなく、性的なものから遠ざかっていたのだろう。

だから、僕のおちんちんを悪戯してくれたり、あそこを僕に弄らせてくれたりしたんじゃないかな。

ママも淋しかったのかもしれない。

高校生になった頃、相変わらずのママとの関係は続いていたんだけど、僕は同級生から、「アナルセックス」っていう言葉を教わった。

それまで、おちんちんを入れるのは、おまんこの穴だけっていう固定観念が有ったのだけど、お尻の穴におちんちんを挿入するプレイもあるって知って、僕は興奮してしまった。

その同級生によると、入れた方ももちろん気持ち良いけど、入れられた方も、お尻の穴で快感を感じるんだって話だった。

当然の事だけど、真つ先に思い浮かんだのは、ママのお尻だった。

ママのお尻の穴に、僕のおちんちんを突っ込んだら、気持ち良いだろうか。

それは、ママにも快感になるのだろうか。

今まで、手でおちんちんを弄って気持ち良くさせてもらったり、指でアソコを刺激して、気持ち良くさせたりはあったけど、僕のおちんちんがママの体に入るなんて、想像するだけでもソクソクしてしまった。

今までは、浣腸を入れるために潤滑剤としてワセリンを塗るだけだったけど、もつと奥まで指を入れたら、気持ち良く思ってくれるかな。

指だけじゃなくて、おちんちんを入れたらって言うたら、入れさせてくれるかな。

おまんこに入れるのは絶対にダメって言われている。

もしも間違えて子供が出来たらとんでもないことだからだし、親子での交わりは近親相姦って言って、絶対にしちゃいけない事なんだ。

お尻の穴は、近親相姦になるんだろうか。

あれこれと考えたけど、どうしたら良いのかは判らなかつた。

素直にママに「アナルセックスしてみたい」って言えば良いかもしれないけど、もしかしたら、ママが怖くなって、もう浣腸も御褒美も一切してくれなくなるかもしれない。

そんな事をあれこれと思いながら日々を過ごしていたけど、僕のお腹は、また便秘になってしまった。

僕はいつものように、ママに浣腸してもらい、いつものように御褒美でおちんちんを気持ち良くしてもらった。当然のように、ママに浣腸してあげる事になり、ママはパンティーを脱いで、お布団に横になった。

いつもと違う思いを秘めたままで、ママのお尻の穴にワセリンを塗り、浣腸を突き立てた。

薬を入れ、いつものようにお尻をペーパーで押さえて、トイレに行つて、戻つて来て、いつものように、僕の目の前で股を開いて、僕からの御褒美を待った。

僕はクリトリスを弄りながら、もう片方の指をおまんこに入れ、中をかき回したが、ふとその粘液の付いた指で、お尻の穴に触れてしまった。

ママは驚いたように「あつ」と声を上げたけど、なんだか気持ちよさそうな顔をしてるから、僕はそのまま、指をお尻の穴に潜り込ませて、撫でるように回転させた。

ママは、何も言わず息を荒くしている。

僕はママに訊いてみた。

「ここを触られると気持ち良いの。」

ママは、困つたような顔をしながら、「まったく、血は争えないわね。」とため息をつく。

「どうどうこと。」

「祐くんも、お尻の穴に興味があるのね。」

「祐くんもして…。」

「あなたの。パパも、お尻の穴が好きだったのよ。」

僕の手が停まって、ママはこんな話を聞かせてくれた。

「ママがパパと結婚したのは、二十歳の時だったけど、それより2年くらい前から付き合ってたの。とっても優しく良い人だったんだけど、ちよつと変わった性癖があつたの。お尻とかが大好きで、ママのお尻の穴を弄ったり、浣腸したがつたりしたの。アナルセックスもしたいって言ってたわ。」

ママは、その頃は普通にセックスする方が良くて、お尻なんて触られるのは嫌だったけど、パパに熱心をお願いされて、許しちゃつたの。お尻の穴に指を入れて弄られたり、浣腸されたり、浣腸してウンチが出る時に、お尻の穴を見られながら出したこともあるの。とっても恥ずかしかつたけどね。そうやって何度も浣腸されたりしてうちに、なんだかお尻の穴も気持ち良く感じるようになったの。それで、結婚して、お前が生まれて幸せだったんだけど、小さな赤ちゃんが居れば、のんびりセックスなんてしてられないし、パパはだんだん欲求不満になつちやつたのね。」

後は良くある話よ。街で知り合つた女と関係を持って、ママと離婚。別れる前に、一度セックスしたんだけど、アナルセックスをさせてくれて言われたの。浣腸までは許したけど、アナルセックスは怖いから拒んだら、『あの女はさせてくれる』って。あの時に許していたら、今でも一緒に居たかもしれないけどね。」

「だから、僕のこと、血は争えないって言ったんだね。」

「そうね。あの頃にあなたのパパから浣腸されたり、お尻を弄られたりして、お尻の穴の気持ち良さも覚えてたけど、離婚してからは、そんなことしてくれるような相手にも巡り合わず、ずっと男つ気無しの母子家庭だったよ。今になって、お尻で気持ち良くさせてくれる相手が現れたと思つたら、あの人の血を引いた実の息子だったなんてね。」

「じゃあ、ママは僕が最初にしてあげた時から、浣腸されるのが気持ち良かったんだね。」

「そうよ。祐くんに浣腸されて気持ち良かった。それに、祐くんが小さい頃から、浣腸してあげて、小さなおちんちんが硬くなるのを見ていて、する方も好きになつちやつて、祐くんが便秘になつて浣腸するのが待ち遠しく思つてたのよ。」

「僕も、ママに浣腸されるのも、ママにしてあげるのも大好きだよ。」

ママが言うには、僕が「浣腸してあげる」って言った時には、本当に嬉しかったそうだ。

自分で浣腸するのは、誰かにしてもらうのでは、気持ち良さが違うんだって。

僕はずっとママにしてもらうてばかりで、自分ではしたことがないけど、そんなものなのかもしれない。

でも、誰かに浣腸してもらいたくても、そういう相手が居なければ病院でお医者さんにもらうくらいしか、そんな機会は無いし、お医者さんだって、簡単に浣腸してくれるわけじゃない。

「便秘でお腹が痛いんです。」くらいのアピールは出来ても「浣腸して欲しいんです。」とは言えないだろうし、お医者さんもそう簡単に、「じゃあ、浣腸しましょう。」なんて言わないと思う。

僕にされるのはとても素敵だったけど、そんなに僕にあんまり浣腸をおねだりするのはいけないと思って、僕にした時だけ、ママにもしてもらおうように自制していたんだって。

ママからのそんな話を聞いた後、僕は改めて、ママへの御褒美をあげた。

クリトリスとおまんこの穴と、お尻の穴の三か所を弄って、何度もママをとつても気持ち良くさせてあげたんだ。最初は、いつものように、クリトリスを揉んだり、おまんこやお尻の穴に指を入れたりだけだったけど、ママも、今まで僕に秘密にしていた事を話しちゃったから、気持ち良くなるのに躊躇いがなくなったみたいだった。

だから僕は、お尻の穴とおまんこに指を入れてかき回しながら、舌でクリトリスを舐めたり、唇で吸ったり、歯で軽く噛んだりなんてこともしてあげた。

最初に、僕が口を近づけた時には、「そんなこと…」なんて言っていたけど、実際にクリトリスを弄られると、とても気持ち良かったようで、声を出しながら、何度も良い気持ちになってしまっていた。

そして、ママは僕にも特別な御褒美として、僕のお尻の穴に指を入れてくれた。

なんだかムズムズして変な感じだったけど、おちんちんは、浣腸された時と同じように、ムクムクと大きくなつて、硬くなった。

そして、お尻の穴の中を撫でられながら、おちんちんを弄られたり、また気持ち良くなつて、白い液を出してしまつたんだ。

それから、僕とママの浣腸と御褒美プレイは続いている。

「祐くんは彼女が出来て、セックスをするようになるまでね。」

なんて言うけど、なんだかママ以外の女の子なんて、彼女にしたいっていう気持ち起きなくて、当分はこの母子

関係が続くんじやないかって思っている。

それに、彼女が出来てセックスするような関係になつたら、お尻を弄つたり、浣腸したり、アナルセックスしたり、いろんな事を、その子に求めてしまいそうな気がする。

そんなことは、させてくれないだろうし、「変態！」って言われて、嫌われて別れてしまうのもなんとなく想像がつく。

僕とママのプレイはだんだんエスカレートして行つて、最近はトイレの中でママがウンチを出すところを眺めて、お尻を拭いてあげたり、二人とも浣腸を済ませた後で、お互いのお尻の穴に指を入れながら、僕はママのクリトリスを舌で舐め、ママは僕のおちんちんを啜えてくれるようなことまでしている。

高校を卒業したら、卒業記念のプレゼントとしてアナルセックスもさせてくれるって、ママから言われている。

「パパにせがまれたことはあつたけど、怖かつたから、アナルセックスはまだしたことないの。だから、お尻の穴は処女だからね。処女を息子に破られるなんて、不思議な巡り合わせね。」なんて言つて笑つてる。

その日が来るのが楽しみで、待ち遠しい。

<https://www.spaceginga.com/>

SPACE 銀河